

昭和62年度

望ましい保育環境についての一考察

～たくましい子どもを育てるための保育環境を考える～

川崎市総合教育センター 幼児教育研修員

望ましい保育環境についての一考察

～たくましい子どもを育てるための保育環境を考える～

¹萩原 八千代

キーワード：幼児教育・保育環境・物的環境・人的環境・5歳児

はじめに

今、私たちの目の前にいる子どもも、3年前の子どもも、その本質には、何の変わりもない。生まれた時は歩けず、話せない。生後6ヶ月で歩かせようとしたり、話させようとしても、それは不可能である。つまり、成長発達の過程は、昔も今も、そう大きな変化はないということである。

人間は、20年もの長い時を要して成長する。この長い成長発達過程の中で、保育者のかかわる幼児期は、「その子どもがどのように遊んだかが、大人になった時、どのように人生を生きるかを決める」(マカレンコ)といわれるように、人生の土台を築く重要な時期である。この時期、子どもは思いきり遊び、その中で多くのことを学びとり、身につけていく。遊びの中でこそ、子どもは育っていくといえる。

ところで、『子どもは、人や物という環境とかかわりながら、自分自身のもつ能力を最大限に発揮し、自分で自分を形作っていくものだ。(高杉目子)』¹⁾といわれるように、子どもを取り巻く環境のよしあしが、子どもの成長発達を、大きく左右する。

しかし、近年わが国では、都市化・情報化、そして核家族や兄弟数の減少による小家族化などが進み、子どもを取りまく環境が大きく変わってきた。生活が便利になった反面、体を思い切り動かす場や機会が失われつつあり、精一杯遊ぶということがなくなってきた。その結果として、たくましさや機敏性に欠ける子どもがふえているように思われる。

このような視点から、私たち保育者は、心も体もともにたくましい子どもを育てるために、どのような保育環境を用意すればよいのか、考えてみたい。

1. 研究のねらいと方法

1. 研究のねらい

昭和62年度学校保健統計調査(文部省調査)によると、子どもの体型は、身長も伸び、足も長くなり、欧米型になったということである。また他方では筋力の弱化・足の変形・視力の低下・意欲の欠如などがいわれており、体は大きい、肉体的・精神的な強さ・たくましさには欠ける現代っ子の姿が、浮き彫りになっている。

以下、次の3点から、たくましい子どもを育てるための望ましい保育環境について、明らかにしていきたい。

○今、なぜ、たくましさの育成が必要なのか。

¹川崎市立生田小学校付属幼稚園教諭(長期研修員)

○1年保育5歳児の、心と体づくり

○たくましさをもつ子どもを育てるには、保育環境をどのように整えればよいか

2. 研究の方法

発達心理、保育、進化論、体育領域などに関する文献研究や、事例研究、そして大地に根差し保育を実践している保育園や幼稚園の見学、小学校の授業見学を行い、基礎資料を収集した。

Ⅱ. 研究の内容

1. たくましさの育成の必要性

(1) 体を使うという面から

最近の子どもたちの手先の不器用さが、しばしば新聞紙上で取り上げられる。たとえばハサミの使い方で、昔のハサミと違い、今のハサミは、刃の角度のよしあしにかかわらず切れる。これでは、指の微妙な力の入れ具合は体得できない。また、箸をうまく使えない・ボタンを掛けられない・紐結びができないという子も、大変多い。その上、上手になろうとする意欲に欠けているのは、便利さへの甘えがあるといえる。

『手指は、物とかがわる最前線にあり、それだけけがをすることが多いが、最も目につきやすく、手当ても早くできる。言ってみれば、多少のけがは計算済みということであろう』²⁾と、大橋皓也はいう。

たくましく物に挑む手の回復がなされることにより、精神的にも強い人間の育成が可能になるのだと思う。

(2) 人と触れ合うという面から

子どもたちの、他人への無関心さも、とても気になる。NHKの1979年の調査「日本の子どもたち」によると、近頃の小・中学生は、限られた同質の友だちとしか付き合っていない、と報告されている。また、近年、赤ちゃんの中には“いないいないばー”や“たかいたかい”にも表情を変えず、声も出さない、という0歳児ノイローゼ（久徳重盛による）が、徐々にではあるが、ふえているとのことである。

人間の感情の源泉は、人と人との関係にある。まず、母親との出会いがあり、その後、色々な個性の持ち主との出会いの中で、自己を形成し、感情をコントロールしていくことを覚えていく。しかし、上記のような、同質化し、希薄化する人間関係の中では、たくましく、感情豊かで、思いやりのある人間は育たないように思う。

(3) 子どもへの願い

以上、手先の無器用、他人への無関心を例にあげたが、このほかにも、戸外での遊びを好まず、素足や素手を嫌う子どもが増えたこと、「疲れた」を連発する子どもが増えたことなども気になる。これらの子どもたちの様子は、たくましい子どもの姿とは、相反するように思える。

今、目の前にいる子どもたちは、21世紀を担う人間である。心も体も、ともにたくましく育ち、国際化社会を積極的に生きていけるような人間を育てることが、私たち保育者の、今なすべきことと思う。

- 健康で、体力があり、安全への配慮もできる子
- 自ら進んで、人や物にかかわりをもとうとする子
- 自ら考え、試し、工夫していける子
- 自らの考えを、相手にはっきりと伝えられる子

○相手の立場に立ち、思いやれる子

上記のことを言い換えれば、自分の考えで、自分の行動で、自分の責任で、健康的に生きていけるたくましい子どもを育てることが、今、私たちに課せられていることなのだと思う。

2. 1年保育5歳児の、心と体づくり

(1) 心と体の発達の道筋

乳幼児は、体が健康な時は機嫌がよく、活発に動き回る。逆に具合が悪い時は、動きが鈍い。つまり、心と体は一体になっているといえる。強くたくましい子どもを育てるには、心と体の両面から見ていくことが必要である。

さて、川崎の公立幼稚園は、小学校入学前の1年保育である。子どもたちの様子を見ると、保育者からの指示がないと行動できない子・友だちと遊べず傍観している子・汚れを極端に気にする子・ハサミを使った経験のない子などと、様々である。5歳児だからこの程度はできる、というような尺度は、当てはまらないことが多い。したがって、子どもの発達の度合いをみる時は、誕生から成人までの心と体の発達の道筋を知っている必要があるだろう。少なくとも、5歳前後の成長発達に関することは、知る必要がある。

そこで、社会性と運動に関する発達について調べ、整理してみた。〈表1〉一般的に言えば、5歳児は、社会性が培われ、運動能力が充実する時期であるといえる。

さて、運動能力には、“自発的使用の原理（ある能力を獲得すると、自発的にそれを使用する）”というものがある。獲得した能力を使うことにより更に運動能力が高まれば、意欲や自信ももて、体のたくましさと同時に、心のたくましさも育てることが期待できる。

(2) 1年保育の留意点

ところで、1年保育児は、2～3年保育の5歳児とは異なった状態を示し、考慮しなければならない点が多い。『言葉で理解できる範囲が広がってはいるが、体を通して物事を習得する姿勢を育むことが大切だ。』『こうしなければならないという考え方を、植えつけてしまわないようにする。』³⁾と、ながねん幼児教育に携わってきている青木久子は言っている。

5歳児という、心と体づくりの大切な時期に、この子らとかかわるということの重大さを、改めて理解し、また1年保育児の複雑な心の動きをしっかりとつかみ、指導していかなければならないといえるだろう。

3. たくましい子どもを育てる保育環境

(1) “子どもの生活は遊び”

わが国には、昭和30年代頃までは、子どもが自由に遊べる場がたくさんあった。原っぱ・小川・土手・崖などに、帰宅するやいなやカバンを放り出して出掛けて行き、日が暮れるまで遊び回ったものである。また、軒下や路地裏も、子どもにとっては格好の遊び場であり、仲間と一緒にになり、ままごと・かくれんぼと、遊びを繰り広げたものである。このような大人の管理を受けない場で、子どもたちは自然に異年齢間のかかわりを持ち、思いきり体を動かし、新しい遊びやルールを作り飽きることなく遊んだのである。

上述のような、子どもの遊びへの強い欲求は、昔も今も変わらないはずだ。この欲求を存分に表出させる場として幼稚園を考えることは、“子どもの生活は遊び”“幼稚園教育は遊びの中で……”ということからも、納得できることではないだろうか。せめて幼稚園だけは、のびのびと遊べる場であらねばならないと考える。

(2) 子ども側に立った遊び環境

ところで、保育の場では、保育環境とか環境設定という言葉は、保育者側の心配りのような概念で使われているように思う。子どもの遊びへの強い欲求を表出させるという、子ども側からみた環境になっているか、見直す必要があるだろう。

〈表2〉の3氏の考えは、昭和30年代頃までのような遊び環境の復活を求めるものとして、大変興味深いものである。3氏の考えを基に、筆者の考える環境設定の視点を整理したので、あわせてそれも記す。

表2 保育環境設定の視点

塩川 寿平	久保田 浩	仙田 満	
○冒険の空間	○変化のある空間	○自然スペース	<ul style="list-style-type: none"> ○できる限り自然を取り入れ、生き物の存在するスペース ○のびのびと思いのままに動けるスペース ○体を動かし、チャレンジできるスペース ○一見、混乱・未整理な状態のあるスペース ○周囲の者から見えない、死角となるようなスペース ○静かに憩えるスペース ○子どもの発想がいかにされ伸ばされる遊具のあるスペース
○探求の空間		○オープンスペース	
○秘密の空間	○広い平面を もった空間	○道スペース	
○創造の空間	○小集会や休憩の ための空間	○アナーキスペース	
○体を鍛える空間		○アジトスペース	
○感動の空間	○子どもが働き かける空間	○遊具スペース	
○憩いの空間			

この表を土台にして、基本的運動能力が育成され、心のたくましさも育つことを願った、物的環境

の例を、資料としてまとめてみた。〈図1〉

(3) 人的な環境

保育環境を考える際に、人的環境が子どもに与える影響がいかに大きいのか、保育者は十分心得ておかなければならない。

「先生が言ったから……」と家庭でもよく話す子どもたちの姿からも言えるように、保育者という人的環境の重みは、非常に大である。保育者は、「師」であると同時に、「ともに生活する人」でもあり、また「人生の先輩」でもある。とすると、保育者の、子ども観・保育観・人生観は重要である。豊かな感性の持ち主であることが、望まれるのである。

(4) T・S君の記録

私の所属園の園児1名を抽出し、成長の記録をつけてきた。この子どもにとっては、長い人生のほんの1年ではあるが、この間、保育環境が与えたものが、大きなプラスとなっていると思いたい。以下、一部分ではあるが、記す。

入園前の様子：S 62年4月現在5歳8ヶ月。父・母・兄・双子の弟と本人。4階に居住し、双子ということで、外に出て遊ぶ経験が少ないまま育つ。集団生活経験なし。

〔1学期の様子〕製作・折り紙が好き。体を動かすことは好まない。理屈をこねたり泣いたりすることが多い。社会性の未熟。頭脳先行型。そこで、2学期以降、自然な形で体を重くず体験を伴う活動を与えていくようにしようと、担任と話し合う。

〔2学期の様子〕9月、全員戸外遊びの日を設ける。裸足になり砂遊びを楽しむ。10月、他児がしていた崖登りに誘うと登りきり「明日もやりたい」中当てなどにも担任がいると入ってくるようになる。自信がつき行動範囲も広がり、物事に挑んでいくようになった。友だちづくりを3学期の目標とする。

〔3学期の様子〕他児の遊びの中に自分から入っていきこうとする。心のたくましさの成長を感じた。考察：「泣くということを気にせず彼にものが言えるようになった」という担任の話を聞いたの

が2学期。保育者と園児という関係でなく、人間と人間の関係が成立した時、T・S君の心は自由になったように思う。子どもを色々な束縛から解放し、自由の喜びを味わわせてあげられることが、大切なことのように思う。そして、幼稚園が、遊んでもらう場ではなく、自らが主導権を握って動ける場になった時、子どもは大きく成長するのだと思う。

(5) たくましい子どもを育てる保育環境

最後に、たくましい子どもを育てる保育環境を用意する際に、保育者はどのような点に考慮すべきかを、まとめてみた。

- 子どもは、常に変化し、成長発達を続けている。このことを忘れず、人的なもの・物的なもの・この両者の醸し出す雰囲気などの保育環境を、絶えず子どもにふさわしいものとなるよう、心掛けることが、大切である。
- 子ども一人ひとりの興味に叶った自由な活動が保障されていることが、大事である。
- 子どもは、冒険心や探求心が旺盛である。困難を克服しようとする努力や工夫の中で育つ力は、非常に大きなものである。このような体験のできる場を、どこかに用意したい。
- 安全点検を、確実に行うことが大切である。
- 保育者自身が感動し、自由に振る舞い、より充実して生きよう、たくましく生きようとする姿勢が、大事である。

おわりに

1年間の研修を通して、物事を多面的に見ること、視点を変えて見ることの大切さを知った。それには、まず自己を真正面から見ることができる、ということが必要なようだ。常に心の開かれた自分であり、学ぶ気持ちを忘れずにいたい。そして、1年間で学んだことを、実践の場でいかせるよう、努力していきたいと思う。

最後になりましたが、このような貴重な機会を与えてくださったことに深く感謝するとともに、心暖まる励ましとご指導をくださいました伊藤和彦所長をはじめセンターの先生方、並びに所属園の吉田豊園長はじめ諸先生方に、心よりお礼申し上げます。

○引用文献

- 1) 高杉 自子編『現代幼児教育全集6・物的環境と保育』 ぎょうせい 1983年 5頁
- 2) 大橋 皓也『実践造形教育大系4・子どもの発達と造形表現』 開隆堂 1982年 57頁
- 3) 西久保 礼造・西本 英子編『現代幼児教育全集7・幼児の発達と遊びの姿』 ぎょうせい 1983年 128頁

○参考文献

- 平井 信義編集代表 『保育研究第10号』 建帛社 1982年
高田 典衛監修 『楽しい体育実践講座16』 明治図書 1985年
高野 清純・林 邦雄編 『図説児童心理学事典』 学苑社 1975年
森上 史朗編 『子どもを生かす環境構成シリーズ第1巻』 内田洋行 1981年

○指導助言者

川崎市総合教育センター 第3研究室長 川崎市総合教育センター 指導主事
村井 守 高橋 庸之

表1 5歳前後の発達の様子

発達	4	5	6	7
遊びの変化 (林邦雄)	<p>(身体的遊戯期 後期)</p> <ul style="list-style-type: none"> ごっこ遊び ボール遊び 描画 ルールを守って遊ぼうとする 	<p>(想像的遊戯期)</p> <ul style="list-style-type: none"> 5～6人での遊び 遊具中心の遊び 地位、役割のある遊び 	<p>(社会的遊戯期)</p> <ul style="list-style-type: none"> 集団での社会的遊び 読書 工作 	
主要な社会的行動	<ul style="list-style-type: none"> かくれんぼの役がわかる 買い物ができる ふざけておどかさず、負けると悔しがる 友達と競争する いれどと言う 可愛そうな話に涙ぐむ 協力して砂山をつくる 禁止の事柄をした子を注意する 	<ul style="list-style-type: none"> 買い物ができる 信号を見て渡る 小さい子の面倒をみる じゃんけんで解決する きっぷを買う 泣くのを見られないようにする 		
津守 眞 (磯部 景子)				
運動機能 (水谷 英三)	<ul style="list-style-type: none"> 調整力 (バランス) 瞬発力 (高く跳ぶ) 筋機能 (体重を支える) 巧緻性 (手輪) 頭の屈曲 持久力 敏捷の距離感 大腿、下腿の運動 	<ul style="list-style-type: none"> 瞬発力 (手足の運動) 巧緻性 (全身的) 指の伸筋、屈筋 両足跳び (非対称性) トレニングを必要とするもの 		
固定遊具 使用能力 (松田 岩男 岡本 卓夫)	<ul style="list-style-type: none"> すべりだい...座って滑る ぶらんこ...腰掛け揺り、立ち揺り少々 鉄棒...前回り降り たいこばし...頂上まで上がれるが疲れない 固定円木...ゆっくり渡る 	<ul style="list-style-type: none"> 色々な滑り方ができる 大きく揺る、飛び出し降り さか上がり等色々できる ジャングルジム...頂上まで登れる 自由に遊べる 走って渡れる 		
まとめてみると...	<ul style="list-style-type: none"> 社会的存在として自己を認識しはじめる時期 大人社会のルールとぶつかりあいが社会性や運動能力を身につけていく時期 ほとんどの運動能力が身につく自分自信を持ちはじめる時期 大人社会のルールとぶつかりあいが社会性や運動能力を身につけていく時期 運動機能の充実に入り一人では集団で相手のことを気づかないながら遊ぶようになる よい体験や本物の体験により、概念が育つ時期 			

図1 保育環境例 (施設・設備)

